



第183号

発行所 上高井教育会
 発行人 上高井教育会長
 市川貞夫
 編集人 会報編集委員長
 市川武彦
 印刷所 須坂新聞社

広目の心で多聞する

持田 和男

私の小さな本棚の片隅にある大須賀舜蔵先生の「いのち分けあいしもの」が、目に留った。昨年T中学にいた時、講師としておいでいただいた折の柔和なお顔を思い出して、以前、目を通すだけに終わっていたので、もう一度読み直してみた。読み進めていくうちに、六章「苦しみこそ救いの手立て」を読んで、ハッとさせられてしまった。先生が京都にある東寺講堂の曼陀羅を訪れ、四天王の「多聞天」と「広目天」を観て、そのすばらしい造型に見とれている時、人間にとって、何よりも大切なことを訴えているのではないかと感動されている箇所の中に、こんな一文が載っていた。

ある母親から、こんなことをお聞きしました。お子さんが両親に言うことには、「お母さんはいつもニコニコしていてほしかった。お父さんは私の話を最後まで聞いてから、いろいろ言うてほしかった。」

母親のニコニコした笑顔は、子どもを無条件に受け入れる「広目」の心を象徴し、父親の最後まで聞く姿勢はまさに「多聞」を表わしていると思えます。そして、「私を信じてほしい。」という願いこそ、社会から孤立して苦悩する人たちの真実の叫びなのです。

これは不登校を乗り越えたお子さんをもつ母親の言葉ですが、私は自校の子どもの姿と対比して考えざるを得ませんでした。私たち教師や親が今、子どもたちにかけている言葉や態度の一つ一つを問い直してみたい。

忙しいからといって子どもの話しを中途半端で聞いていないだろうか。威圧的な指導になっではないだろうか。自分の引いたルールに子ども達を強引に乗せようとしてはいないだろうか。等々。

私たち親や教師の子どもに對する姿勢が「広目」ではなく「狭目天」に陥ってはいなかっただろうか。また、「多聞」ではなく「多弁天」になっっていないだろうか。反省しきりである。(墨坂中)

本校の中核活動

地域に奉仕するVS活動

東中学校

我が校が位置する仁礼地区の幹線沿いは「フラワーロード」の名にふさわしく、今サルビアの花が満開に美しく咲き誇っています。その一角、県道須坂インター線の鮎川沿いに『東中学校コスモス街道』が設けられています。

コスモス街道は平成六年度の生徒会から、VS活動つまりボランティア・サービスの一環として、地域の美化に貢献しようとして始められたものです。当初、荒れ地で植栽に適さない場所でしたが、地域の協力を得て下草刈りや堆肥を入れて、年々整備してきました。

毎年緑化委員会が中心となり種蒔きから育苗を行い、五月下旬にPTA親子作業で苗を植え付け、汗を流し作業をする中で親子の対話を深めています。本年度は地域の老人会や花づくりの有志の会の花と統一を図りたいとのことで、サルビアを植え付けました。その後各学級で当番活動として、学校から約1km離れた「コスモス街道」までジョロを持ち毎日灌水に行き育てました。そして全校VS活動として全校生徒により、除草・花ガラ摘みの手入れなどに励み、大切に育ててきました。生徒は日に日に順調に育つ花を見て、自然を愛し慈しむ態度と勤労の

精神を養ってきました。

本年度、花づくりの他、道沿いの歩行者道路のゴミ拾いや街路樹の手入れなどが評価され、日本道路協会より全国表彰を受けました。また須坂市が主催する「須坂市の町づくりコンクール」で金賞を受賞しました。

なお、PTA親子作業では、通学路の空き缶拾いや地域の児童クラブの清掃、特別養護老人ホーム須坂荘や高齢者知的障害者福祉施設悠生寮のお手伝いも行っています。

須坂市には、JRC委員会(青少年赤十字)が中心となり、毎週一回ボランティアを募り、ホームを訪問し、介添えやシート交換などを手伝ったり、お花見会などにも参加して交流を深めています。

教育会だより

8・27 教育講演会(於市公民館三階ホール)

○講師 藤原 正彦先生

○演題 「二十一世紀を担う子どもたち」

8・31 第2回研究小委員会

9・8 第4回常任委員会

9・21 第5回同好会

9・27 第5回代議員会

9・28 第3回研究小委員会

9・30 女性教師・青年教師研究大会(於須坂小学校)

10・2 上高井教育研究集会(於相森中学校)

10・12 第6回同好会

10・12 上高井教育会報183号発行



ています。また資源回収での収益金で毎年車椅子と電動ベッドを贈呈してきて喜ばれました。お年寄りとの交流を通して得た体験は、生徒にとっては何物にも代え難い心の財産となっています。

これからも地域へのボランティア活動を通して、「学ぶ心」「思いやる心」「鍛える心」を磨き自立する生徒の育成をめざしていきます。(文責 片桐秀一)

海外研修 日韓友好、その光と影

和田 佳司

第22回日韓友好親善の旅
(七月二十九日～八月五日)
に参加させて頂き、私なりに感じたこと、学んだこと等を報告したいと思います。

七泊八日の旅ではありましたが、最初の二日間は釜山の天候が悪くフライトできず、名古屋に連泊となってしまい、実質五泊六日のたいへん内容の濃い旅行となりました。韓国入りしてから、朝鮮半島を縦断するように北上する台風の後を追いかけるような行程であったため、釜山、慶州、清州、ソウルと天候にはあまり恵まれませんでした。が、どの地でも熱烈的な歓迎を受け、韓国の方の温かさを感じる事ができました。

①釜山にて
韓国第二の都市である釜山は、東海(日本海)に面し、肉眼で対馬を見ることができるといふことに驚きました。夜景で有名な釜山ですが、釜山タワーから見渡すと、三六〇度、どこまでも夜景が広がっており、まさに絶景でした。

②慶州にて
慶州では、ナザレ園という老人福祉施設を訪ねました。

③清州にて

清州では、清州大学の伊藤先生にたいへんお世話になりました。伊藤先生は、この訪韓団を毎年お世話して下さい、この旅で最もお世話になった方の一人です。

清州では、清州大学一年生のキム・ミファンさんという女子学生のお宅にホームステイをさせて頂きました。ミファンさんは、両親と兵役に出ているお兄さんとの四大家族で、大学では日本語を専攻していることもあり、たいへん流暢な日本語を話すのでこちらも助かりました。また、両親にもたいへんお世話になりました。お二人とも韓国では指折りのバドミントン選手だということ、朝六時からバドミントンの特訓を受けました。ものすごい音でシャトルが飛びかう中、一人場違いのような気もしましたが、二日間バドミントンの腕も上がったような気がしました。

また、清州では、地元の小学校を訪ねることができました。驚いたのはコンピュータ一面の充実で、コンピュータ室のパソコン台数もさることながら、各教室の教卓にもパソコンが設置されていて黒板を使わなくても授業が行えるようになっていました。その他、実物投影機などの視聴覚機器も各教室に設置されていました。また、日本同様韓国も夏休みでしたが、自習をしている子どもがたくさんいて、韓国人の勤勉さを垣

各種研修会

間見たような気がしました。

④独立記念館
日本軍の残虐行為がこんなにひどいものだったのか、そして韓国の英雄は、ほとんどすべてが日本から韓国を守った人たちだということを感じ知らされました。友好ムード一色の今回の旅行において、決して目を背けてはならない事実を思い起こさせてくれる

初めての県外視察。朝の活動から参観したくて、胸をときめかせて、富山に向った。朝活動「くらしのたしかめ」では、自分たちが今夢中になっている事を話題にし、自分の想いを伝えながら、友達の想いを受け入れている子どもたちの姿があった。

授業は、四学年の体育を参観させてもらった。「わたしのゆか運動」として、曲選びから、技の練習まで、すべて一人一人の活動であった。十メートル四方のマットの中で体全体を使って、自由に動きまわる子どもたち。発表している仲間を励まし、手拍子をしてながら共に曲にのる子どもたち。自分の願いに沿って、視線の向きまでも考える子どもたち。そんな子どもたちの動きがとても自然で、とても新鮮だった。

仲間にエールを送る集団、失敗した友を励ます集団、活動そのものは一人一人だが、お互いに相手の考えを気にとめているあたたかい学級集団を感じた。

子どもたちだけでなく、校舎を見ても驚いた。子どもたちの下駄箱や階段の壁に、子どもたちが取り組んでいる途中の絵があった。

子どもたちの下駄箱には、様々な色が輝いていた。まるで子どもたちの登校を迎えてくれているようなそれぞれの想いが込められた色だった。

六年女子のトイレには、花やぬいぐるみが置かれ、ラジカセからは流行の曲が流れていた。

自分たちの生活を自分たちで考え、つくり上げている様子を実感した。

放課後の自主活動では、学

場所でした。

⑤終わりに
韓国は近くて遠い国と言われますが、決してそんなことはないと思います。ただ簡単には埋めることができない大きな隔たりを感じる場面もありました。今回の貴重な体験を与えて下さった先生方、ありがとうございました。(須坂小)

低学年の足が不自由な女の子。一人で一輪車のサドルの修理をしていた。一輪車を持つのもやつの小さな体の女の子が、たった一人で破れたカバーをガムテープではついている姿をみつけた。

彼女たちのそんな行動の中にある強い想いは、一体どこからくるものなのだろう。

前者の女の子は、体育の授業を通し、苦手を運動に挑戦してみようという勇気を持っていた。また担任の励ましや支えによって、自分自身に対する自信を持っていた。

子どもたちは、自分の良さを感じ、それがまわりからも認められた時、初めて自信をもち、頑張ろうとする第一歩を踏み出すのだと思う。

大人の価値観を知識として押し付けるのではなく、子どもたちが自分の思いを大事にし、一人でも行動できるように、日々の生活の中で、子どもたち一人一人の思いを感じ、最大限努力してあげる教師でありたいと思う。(高山小)

子どもたちは、自分の良さを感じ、それがまわりからも認められた時、初めて自信をもち、頑張ろうとする第一歩を踏み出すのだと思う。

大人の価値観を知識として押し付けるのではなく、子どもたちが自分の思いを大事にし、一人でも行動できるように、日々の生活の中で、子どもたち一人一人の思いを感じ、最大限努力してあげる教師でありたいと思う。(高山小)

子どもたちの「色」が輝く時

関 千保

子どもたちの「色」が輝く時

子どもたちの「色」が輝く時

子どもたちの「色」が輝く時

子どもたちの「色」が輝く時

子どもたちの「色」が輝く時

子どもたちの「色」が輝く時

子どもたちの「色」が輝く時

子どもたちの「色」が輝く時

子どもたちの「色」が輝く時

子どもたちの「色」が輝く時

子どもたちの「色」が輝く時

子どもたちの「色」が輝く時

子どもたちの「色」が輝く時

子どもたちの「色」が輝く時

子どもたちの「色」が輝く時

子どもたちの「色」が輝く時

子どもたちの「色」が輝く時

子どもたちの「色」が輝く時

子どもたちの「色」が輝く時

に参加して

「雪の中の炎」と 「みちの記」の舞台を辿る

内本みさ子

高山村といえば、温泉につかって牧場でソフトクリーム、そして一茶ゆかりの里。初めて北信に赴任して高山村について知っていることと言え、これくらいでした。今年、上高井文学同好会では、『雪の中の炎』（高橋忠治）『みちの記』（森嶋外）の舞台を辿る」と題し、八月三日に夏期学習会を行いました。世話係の中澤先生、会長の柳原先生にお骨折りいただき、高山中の和田吉先生を講師にお迎えして高山村の文学史跡を散策しました。

「雪の中の炎」は明治三年長男誕生間もないにも関わらず初めの妻登志子と離縁する直前に書かれたものだそうです。嶋外は、その頃、須坂を通り、高山の藤井荘に宿泊し、軽井沢を通って東京へ戻る旅をしていました。嶋外がどの道を通り高山へ入ったかは明らかになっていませんが、嶋外は



はじめ、多くの文人が通ったとされる溪谷沿いの道が「舞の道」として整備されています。今回は時間の都合で歩くことができませんでしたが、秋、紅葉が深くなった頃、ぜひ歩いて見たいなあと思いました。

更に登り山田温泉の近くで一茶や山頭火の句碑も見学しました。今まで温泉に入っておりすぎてしまっていたところだったので、新たな発見でした。更に山道を入ったところ

子どものためなら

新山亜希子

九月十八日、心配していた天候にも恵まれ、小山小学校家庭運動会が行われた。私にとっては教師になって初めての運動会だ。子どもたちと良い思い出になるような運動会になればと思って臨んだ。

お昼休み。みんなで輪になってお弁当を食べた。しばらくして一人の男子児童が、照れくさそうにやって来て私にブドウをくれた。またしばらくして同じ児童がやって来て、今度はナシをくれた。うれしかった。その時、九月に参加した生徒指導研修会のことを思い出した。私に果物をくれた児童は、その研修会のレポートで取りあげた児童であったからである。初任者研修はいつも考える機会を与えてくれる。そのレポートを作成する

本校の宝②

藤の満つる時 日野小学校

『ふじよ、藤よ、学びやと共にいつまでも健やかであれ』

校名が尋常小学校と農工補習学校の門札が並べ立てられた時代から国民学校へ、そして六・三制の今の学制へと、また村立から町立に町立から市立へと変わってきたことも合わせ考えると九十年の歴史が偲ばれ、藤への思いがつのります。この藤の花の前に座ると、腰まで浸って稲の苗を植えられた泥田が大雨の度に稲穂が水に沈んで、浮島に似た当時の日野地区の田園風景が目に見えそうです。見事に花開いた藤棚の下で地区の方々を招き、こんな話を交わし合う「藤見の会」が今年で五十年以上も続いてきています。そして、恩師や幼な友達



「藤見給食」を行い、楽しい一時を過ごしました。いつかこの日野小学校の紫色に染まった藤の花を思い出してくれることでしょう。

かたく組み合って離れる枝、お互いに支え合って巻きつく姿は、私たちに何か人間として大切なことを教えてくれているように思われます。これからも子供たちと同じように大切にしていきたいです。

(西澤直記)

火ばら 談義



井上小 山本幸介

八丈島への旅

高野喜久夫

本年度の常盤中学校の職員研修旅行は、夏休みに入って間もない7月30日～31日に行いました。天候にも恵まれ想い出に残るすばらしい旅行になりました。

長野駅から新幹線、羽田から飛行機で午前中には八丈島に到着しました。交通が便利になったことを痛感しました。1日目は、島内をバスで観光しました。ペテラン・ガイドさんの案内で、時間が経つのが大変早く感じられるほど楽しませてもらいました。

2日目は、午前中、釣り・スキューバダイビング・島内バス観光・サイクリング等の希望別のコースでした。私は、昨年度の氷見での船釣りに懲りることなく今年も船釣りに参加しました。案の定、今年も船酔いで苦しめられました。しかし、面白いようにメジナ・



ニザダイ・鯉など大きな魚が釣れ、船上は活気に満ちてきました。大漁でした。集合場所の料理店で、この日に釣った魚の一部を刺身にして食べました。他の魚は宅配便で自宅へ送りました。今年も夏休みにいい思い出ができました。(常盤中)

「ぼたん飯と丹波の山ぎる」

山岸 信之

今夏、大名墓地探訪で訪れた城下町の一つ、柏原町。兵庫県氷上郡にあり、京都に近い北東の山間にある。織田信長の次男信雄を祖とする織田家二万石の旧城下町だ。

陣屋跡は国指定史跡で、玄関と雁行式に続く大書院が当時のままだと現存している。ちなみに、全国五ヶ所しか残っていない陣屋跡の遺構としては随一という。重層瓦屋根をのせ、左右に屋敷が広がる藩邸

で、玄関は檜皮葺千鳥破風を突き出し、手前に重厚な唐破風を重ねている。見上げると飾り瓦に織田家の定紋の爪紋が金色に輝いて美しい。長いこと崇広小学校の校舎として使用されていたが、国史跡指定と同時にこの小学校は近年陣屋を鍵形に囲むようにその背後に低く真新しく新築された。全く新旧二様の建築群が存在しているが、背後の鉄筋校舎は陣屋の影に隠れて見え

アメリカ旅行

奥原 美江

叔母以外はみんなアメリカ人、日本語を話すのは叔母のみという環境の中で、叔父やいとこたちはほとんど英語で話すことができなかった3年前のアメリカ旅行。その罪悪感とストレスから「アメリカに行くのも一回きりかな。」なんて弱気なことを思っていたのですが、この夏、再びアメリカの叔母の家に遊びに行ってきた。今回の旅行で悟ったこと。それは、「日常会話は中学英語で何とかなる。」ということ。英語で話すことを簡単に考えられるようになりました。

いとこの「Tracy」とデイズニールランドへ行ったのですが、「Tracy」は日本語が話せないの、会話はすべて英語でなくてはいけません。「どうやって話そう?」頭に浮かんでくるのは中学英語の文法です。「I want to...」「There are...」の構文をよく使いました。高校でも必死に勉強したのに、パッと浮かぶのは中学英語だから不思議です。空港でも乗り継ぎが分からなかった時、「どうやって行けばいいですか」という英語が思い浮かばなかったのだ、「I want to go」と係員



編集後記
各校では、運動会や文化祭が無事終了したかと思いますが、本号では、研修に関する内容を中心に編集させて頂きました。ご多用中、原稿依頼を快くお引き受けくださり、貴重な原稿をお寄せいただき、ありがとうございました。先生方に深く感謝いたします。(山浦・中西)

ないように配慮されている。この辺りは町の中心部で役場・農協・郵便局・柏原高校・小中学校や観光施設等、町の重要機関の多くが集中している。信州松代に似ている。しかし、町を囲む丘のような山々には、現在も野性の猪が群生しているという。織田家の菩提寺に行き、廟所を囲む背後の山の東西に、妙な柵が延びていた。何のための物か分からなかったが、後で柏原駅に行ったらところ販売されていた駅弁「ぼたん飯」を見て、猪の防護柵と知った。ぼたんは猪、もみじは鹿と花札にも出ている。猪の首をぶつ

た切ったイメージの容器入りで、山菜の猪肉の煮つけが主で、馬肉を思わせる美味であった。もう一つ。この山間の田舎町で数百年は続いているという酒造家の蔵の奥でやっと見つけた物がある。「丹波の山ぎる」だ。猿のこしかけと蜂蜜、山梅をブレンドした秘酒だそう。丹波は全国的に有名な丹波杜氏(酒造出稼ぎ)の地でもあり、信州へもやって来る。そのわりに有名酒が聞かれない。とにかく見つけて、自己満足しながら、織田家城下町を出た。(高甫小)

に言ったら、すぐ乗り継ぎの方法を教えてくださいました。「Hi」と声をかけてくれる

店員さん。人込み離れたトイレですれ違いざまに「Hello」と声をかけてきた男性。気さくな人たちに会えたことも英語への恐怖感を取り去ってくれました。

Hearingは力不足だけど、またアメリカに行きたい気分です。(仁礼小)